



イエス団報

Jesus band news

2022/10/15

26

再刊 26 号（臨時特別号）

- 施設長研修会報告
平和を作り出す ～私たちの思い～
講師：金井創牧師
日本キリスト教団佐敷教会
- イエス団 平和メッセージ

発行：2022 年 10 月 15 日
発行者：黒田 道郎
編集・発行：
社会福祉法人・学校法人 イエス団
〒651-0076
兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20
TEL：078-221-9565
FAX：078-221-9566
<https://jesusband.jp>
mail to: honbu@jesusband.jp

施設長研修会報告

2022 年 2 月 24 日に始まったロシアによるウクライナ侵攻に、全世界は大きな衝撃と悲しみを抱きました。イエス団各施設では、この情勢を受けて私たち法人の使命とは何か、何をなすべきなのかを改めて問われることとなりました。

7 月の施設長研修会で「平和を作り出す」をテーマに金井先生にお願いし「沖縄の現状」を通して、戦争や平和について自分たちに引き寄せて考える機会を与えられました。

金井先生のお話は大変有益で、どうしても他人事と考えがちになる私たちに「あなたはどのように考えますか？」「あなたはどのように行動しますか？」を突き付けられた思いがしました。ぜひイエス団施設に連なる職員の皆さんにも先生のお話を共有していただき、何かを感じ考えるきっかけとなれば…という願いで臨時特別号として編集いたしました。

講演内容の文章化を快く承諾してくださった先生に感謝申し上げます。

企画委員会

平和を作り出す

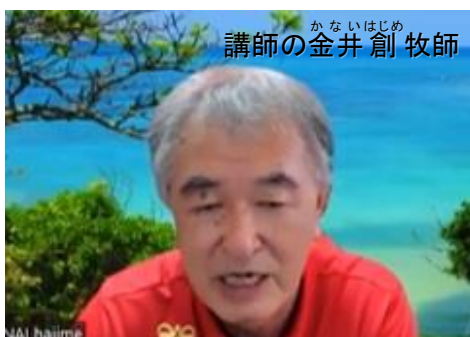
～私たちの思い～

講師：金井創先生 日本キリスト教団佐敷教会牧師

2022 年 7 月 15 日（金）

於：Zoom 開催

よろしくお願いします。最初に言い訳とお断りをしなければいけないと思っているのは二つありまして、一つは主に保育園、幼稚園の園長として活動されておられる、日々子どもたちと接しておられて毎日が子どもの成長とともに歩んだり、色々な出来事に心を砕いておられる先生方に私の話がすごく遠い話になるなあという言い訳が一つ。現場ですぐ役立つ話では全くないというのがあります。



講師の金井 創 牧師

もう一つは、ご紹介にあったように、いま私は辺野古で基地建設抗議の現場でずっと関わっていて、そういう意味で、通常は現場の生々しい話がすごく多かったです、今回準備をしていて、それを入れると 3 時間くらいになるので、申し訳ないですがその話はカットして、ウクライナ戦争があって、本当に日本も危ないぞという観点から、どういうことが危ない事で、そして私達はそれに対して何ができるんだろうか、何を見ておくべきかというようなことを中心にお話をしたいと思っています。

はじめに

これは、今日ご紹介する中では唯一辺野古の現場の写真です。埋め立て工事が進む中で、こうしたカヌーが近くまで行って抗議をする。すると海上保安庁の隊員が飛び込んできてカヌーを拘束するという。そういうのを連日繰り返している場面ですけれども、写真の奥の方に緑の丘がありますけれどもこれが辺野古の弾薬庫なんです。



【辺野古での海上抗議活動・奥に見えるのが弾薬庫】

沖縄には大きな米軍弾薬庫が二つあります。この辺野古の弾薬庫と嘉手納基地の隣の嘉手納弾薬庫です。

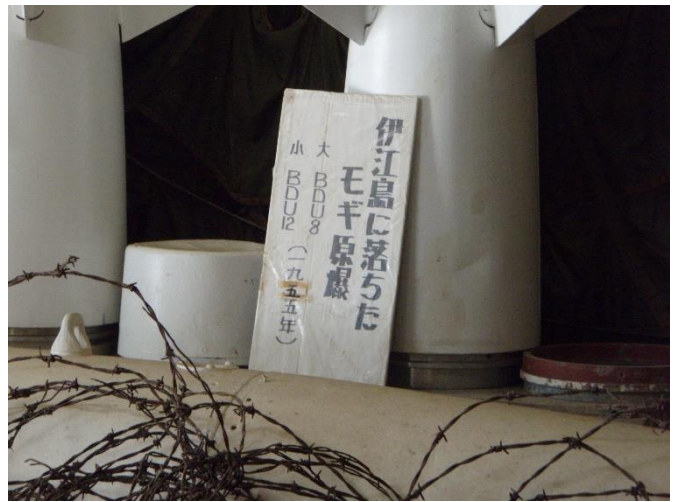
そして辺野古の弾薬庫はこの数年で大幅な改修工事と、新たな弾薬庫施設の建設が進められてきました。

ですからここも大きく変わってきています。そんなに施設を拡充して、何を置くのかという事は一切発表されていないので分かりませんが、日常の中で米軍の弾薬庫が大々的に拡充されていくのも不気味な話だなと感じています。もしここに基地が作られると、この弾薬庫がセットになるのです。機能が何倍も強化された基地が作られようとしている現場であるという事をまず、最初にご紹介をしました。

模擬爆弾 ～伊江島の土地取り上げ～

今日の話の最初は核の問題からしたいと思います。1950年代阿波根昌鴻さんたちが暮らしている土地が強制的に取り上げられてしまいました。

みなさんご存じでしょうか？戦後アメリカは空から直撃で落としたり落下傘を付けてゆっくり落としたりと模擬弾を使ったいろんな原爆投下訓練を伊江島でしきりに繰り返していました。ところが、原爆投下訓練の訓練地が狭すぎて標的にうまく当てられないというので倍近くに拡張するために、土地が取り上げられたのです。これが有名な伊江島の土地取り上げです。



【伊江島に落ちたモギ原爆 1955年】

住民の目から見ると、それはまさに生きる基盤である農業の場所、暮らしの場所、生きるための土地を取り上げられたという出来事です。アメリカの視点から見ると、原爆投下訓練に必要な土地を広げたという、また違う姿が見えてくるわけです。

伊江島の阿波根さんが作られた反戦平和資料館に展示されている伊江島に落ちた模擬原爆の写真です。1955年ですから、阿波根さんはずっと拾い集めてこの資料館に展示してあります。1959年9月には伊江島でこの核模擬爆弾を解体している時に2人の男性が爆発で死亡する事件がありました。阿波根さんの資料や資料館の写真などにも残っています。



核模擬爆弾だったので基本的には爆発するような爆薬は入ってはいませんが、ちゃんと目標に到達したかどうか分かるために、着弾すると大量の煙を出す仕組みになっている。巨大な発煙筒みたいなものです。至近距離で人が巻き込まれたら死ぬという規模の爆薬が仕込まれていて、その爆発だったという事が明らかになっています。伊江島の戦後はアメリカの核戦略の最前線にずっと置かれていたのだという事が分かります。



【模倣原子爆弾演習に使用する落下傘】

沖縄に配備された核兵器が意味すること

1950年代から沖縄にどんどん核兵器が配備され、増強されました。飛行機から投下する爆弾。地対地ロケットミサイルや迎撃ミサイル、海を越えてソ連、中国にまで届くような核弾頭が付いた兵器が次々と配備されました。これは、当然戦争になったら核兵器を置いてある基地が敵に奪われるという事も想定されるわけです。その時の作戦も米軍で考えられていて、敵に取られるくらいなら、自ら破壊するという段取りができていました。基地を守るために、核を置いてある基地を自ら核兵器で焦土にしようという作戦が本当にあったのです。

沖縄を捨て石にするという事は計画の中に盛り込まれていて、あの太平洋戦争末期の沖縄戦が終わった後も沖縄は再び捨て石にされかねないという計画と作戦が実際に有ったんだという事をここで押さえておきたいと思います。

1959年6月19日には那覇空港の近く、那覇基地で核弾頭が付いたミサイルが誤って発射されてしまい、米軍兵士6名が死傷するという大きな事故が起こっています。幸い放射能漏れ、あるいは核爆発などは起こらなかったわけですが、実際にミサイルが誤って発射されてしまった。そういうナイキの基地が沖縄本島でも8か所、4発ずつの核兵器、迎撃ミサイルが置かれていました。

60年安保とは

その時代を全部まとめてみるとこういう事です。

1960年に結ばれた日米安全保障条約というのは、日本本土には核は置かないで、沖縄だけに核を配備する。そしてその抑止力に日本全体が依存するという仕組み。これが固定化されたのが60年安保だという事ができます。

ですから、危ないものは沖縄に置いておけ。しかしその危ないものによって、抑止力、核の傘ですね。日本はずっとアメリカの核の傘の下で安全を享受してきた。核の傘といっても、沖縄に核が集中して置かれた。それによって日本全体の安全が、沖縄以外の安全は守られていたという。

ですから戦後もずっと沖縄はそういう形で日本本土の捨て石というか、犠牲にされ続けてきている。これ

が核の問題においても顕著にあらわされています。

61年になりますと、今度は攻撃型のミサイル、メースBの配備が始まります。沖縄島の4か所、読谷村、ホワイトビーチ、金武村、恩納村それぞれに8発ずつの核ミサイルが配備されました。当時は東西冷戦でアメリカとソ連が敵対しあっていたが、沖縄のメースBの主な攻撃対象は、中国の都市が標的として定められていました。

キューバ危機

1962年の10月、世界を震撼させたキューバ危機。これは本当に世界で核戦争が始まるのではないか、というぎりぎりの瀬戸際まで行ってしまったわけです。

その時の沖縄のメースBの発射基地も臨戦態勢になっていて、ミサイルだけではなく、嘉手納基地でも戦闘爆撃機あるいは輸送機などが核爆弾を搭載して滑走路で待機していたというところまで行っていたわけです。

実際この輸送機は核爆弾をどこに運ぶのかということと日本国内です。日本国内の基地に核爆弾を運ぶという任務を帯びていました。また、韓国のクンサン基地には実際に核爆弾が運ばれていきました。本当に核戦争一步手前なわけです。

1967年のピーク時には1300発の核兵器

こんな形でどんどん核が増やされて行って、沖縄における核のピークは1967年の時点でなんと1300発もの核兵器が沖縄に置かれていました。キューバ危機の時に標的が中国だったわけですから、先制攻撃として沖縄から中国に発射されると、当然、報復攻撃が来るわけで、沖縄は消滅していただろうという、メースBが配備されていた基地の米軍兵士たちの証言でも語られています。

「これで沖縄は消滅する」という瀬戸際まで行ったのがあのキューバ危機で、しかもソ連に向けてではなくて、先制攻撃として中国に発射するという事が実際にあと一步というところまで行っていたわけです。

沖縄の核兵器

1972年の沖縄の「本土復帰」で核はゼロになったことになっています。でも、それと引き換えに米軍は日本の基地を自由に使用できることと、密約によってアメリカは必要な時には沖縄に核を持ち込めるという道は残してあったわけですから、全く意味のない。沖縄から核がなくなったといってもいつでも戻って来られる。ですから、今の沖縄のさっきご紹介した弾薬庫はいつでも核兵器を受け入れられるように常に整備管理されています。

実際のところ今、あるのか、ないのかというのはわかりません。わからないというかアメリカは一つの方針を持っていて、どこの基地、どこの弾薬庫にも、ここに核兵器はあるのかと聞かれたら、あるとも言わない、ないとも言わない。これがアメリカの基本方針です。ですからどんな場所で核の存在を聞かれても答えは全く一緒です。あるとも言わない、ないとも言わない。ですから沖縄に関しても当然、あるとも言わない、ないとも言わない。あっても不思議ではないという事です。

日本の姿勢

日本の姿勢は、日本本土に核を置くことは拒否するけれども、沖縄であるならば黙認する。この「復帰」の時から続いている姿勢が、今の南西諸島、奄美、沖縄、宮古、石垣というところにミサイル配備することに繋がっていないだろうか。危ないものは遠くに置いておけという姿勢ですよ。自分たちの庭先は困る。

現在の自衛隊－皇軍の復活－

そして今、配備が進んでいるミサイル部隊だけではなくて、自衛隊そのものが性格を大きく変えてきています。

現在の自衛隊、一つは戦前回帰、いわゆる天皇の軍隊皇軍の復活。そしてもう一つは米軍との一体化です。一体化するという事は米軍の都合あるいは論理で動く軍隊だということです。独自の判断で動くのではなくて、米軍の下請けとして動くという自衛隊。自衛隊の性格はどんどんそのようになってきています。

これが南西諸島への自衛隊配備の状況で、このように約 2400 名が各島々にすでに配備されていますし、これから配備されていきます。

奄美大島	600名・・・2017～2020年
与那国島	210名・・・2016年
宮古島	800名・・・2017～2020年
石垣島	600名・・・2017～2020年
うるま市勝連	180名・・・2023年
合計	2,390名

どんな部隊なのかというと、ミサイル部隊であるとか、水陸機動団であるとか。2023 年にはうるま市勝連に地対艦部隊が配備されます。そして南西諸島全体のミサイル部隊の連隊本部などが置かれる準備をされています。他の島々のミサイル部隊だけではなく沖縄本島の航空自衛隊も倍に増強されています。このようにどんどん増強が進んでいます。

そういう自衛隊がなぜ皇軍の復活なのかというと、これが自衛隊の勧誘ポスターです。



左は西東京、右は沖縄です。西東京は「守りたいもの

を守る人に」沖縄は、「美ら島の未来を護る君の手で」というソフト路線で隊員募集をしていました。

ところが、3 年くらい前に初めてこのポスターを見た時はびっくりしました。今はこれですね。



NEXT 自衛隊 国家を守る、公務員。

「NEXT 自衛隊 国家を守る公務員。」ついにこれを使いだしたかと。守りたい人や美ら島ではなく、国家を守るなんです。軍隊としての本性を隠さなくなった。つまり国家を守るといのは戦前の言葉で言えば国体護持なのです。自衛隊が守るものは住民とか市民ではなく国のシステム。天皇を中心としたこの国の仕組みをこれが自衛隊の本当の役割。ですから、戦争になったら軍隊は住民を守らないということです。

これは沖縄戦を体験した人たちが本当に多くの犠牲を払って痛みを伴って残してくれた貴重な教訓です。

「戦争になったら軍隊は住民を守らないよ。」

だから、軍隊が置かれる、基地が置かれると守ってもらえるから安心というのは幻想です。軍隊が来ることで、基地がそこに置かれることでむしろ戦争を招きこんでしまう。呼びこんでしまう。そしていったん戦争になったらその軍隊は住民を守ってはくれないという事。沖縄戦の教訓であったはずなのですが、その沖縄にどんどん自衛隊の基地ができていくというのは本当に皮肉な事だと思います。

そして2018年に水陸機動団が新しく創設されました。新設されたので色々なものが新しく作られるわけです。



これが水陸機動団のマーク徽章です。本当にびっくりしますね。ここに剣が描かれています。これは草薙ぎの剣です。天皇の三種の神器の一つです。天皇を象徴する剣です。その上には金色のトビ。漢字で言うと金鷄（きんし）

です。これは戦時中まで非常に活躍した軍人に授けられ

た最高の勲章が金鷄勲章というのがありました。金のトビをあしらった勲章ですね。ですから、この金のトビと草薙ぎの剣が描かれたものが今の自衛隊のマークとして使われるというところに、戦前の皇軍の復活がよくあらわされていると思います。これはカラーでまだ良いのですが、こっちの方がちょっとおどろおどろしいと思いませんか？



これも旗ですよ。草薙ぎの剣と金のトビが描かれています。

水陸機動団は何か？なんでそんな新しい部隊ができたのかというと、これは自衛隊版の海兵隊です。米軍の中にある海兵隊という組織は日本にはありませんでした。陸海空の自衛隊ですよ。その陸上自衛隊の中に水陸機動団という名のいわば海兵隊ができたのです。海兵隊というのは国を守る軍隊ではありません。外地、外に攻めて行って敵地に上陸して乗り込んで行って、戦争をするというのが海兵隊の性格です。それと同じ性格を持つ軍隊が日本の中についにできてしまったということです。

MILITARY BLOG



【自衛隊の水陸機動団】

米軍との一体化

そしてこの米軍との一体化。どういう風に進んでいるかというと、自衛隊がもう 53 両購入している AAV7 という水陸両用の装甲車です。この中に 25 名の完全武装した兵士が乗って、このまま敵地に上陸していくわけです。浮いている時は船として進み、陸上に上がればキャタピラのついた装甲車として進み、この中から 25 名の武装した兵士が飛び出してきて戦闘するというのが、この AAV7 なのです。



【水陸起動団の水陸両用装甲車 AAV7】



【米海兵隊の水陸両用装甲車 AAV7】

これはもう辺野古で日常的に目にしている光景です。これは海兵隊の AAV7。私たちはしょっちゅう辺野古の海で訓練しているのを見えています。それと同じ装備を自衛隊が持ったわけです。敵地上陸の為の兵器ですね。



これが AAV7 を背景にした訓練模様ですそして、米軍と自衛隊が一体化した離島奪還訓練が始まっています。



これは自衛隊がオスプレイを買う前の写真ですから、

これは米軍のオスプレイです。米軍兵士と自衛隊兵士が一緒になってオスプレイを使って離島奪還訓練をすでに何年も積み重ねてきています。

離島奪還訓練とはどういうことなのかというと、イメージ図がありますが、この島が（侵攻者に）上陸されて占領された。それを奪い返すのにどんな兵器を使って、どういう攻撃をするかというイメージがこれです。

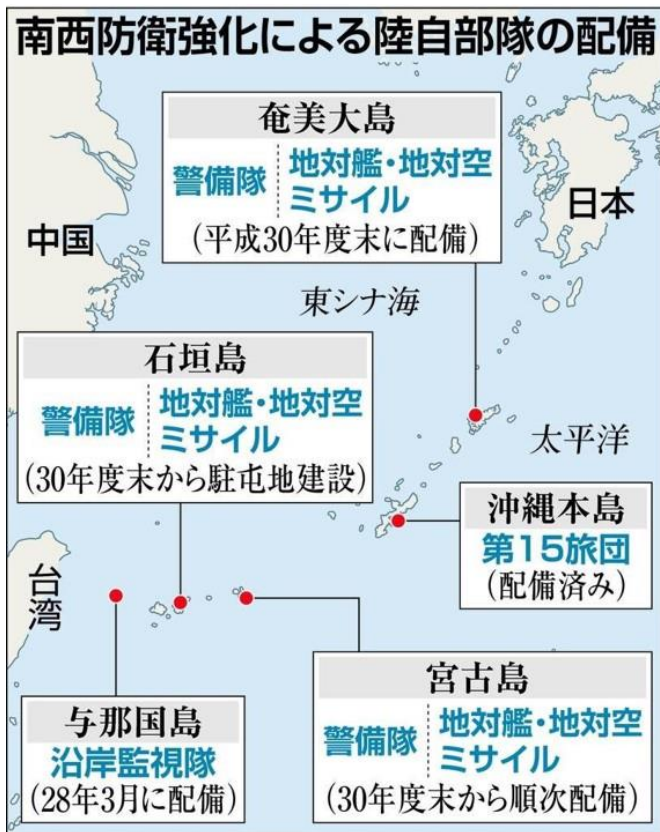


政府は、離島奪還の離島とはどこの事かという質問に対して、大体尖閣諸島を考えているという事をずっと繰り返してきています。しかし、人が全く住んでいない無人島の尖閣をこのように奪われたとして、ここまでの軍隊を派遣して奪い返そうとするのは、これはもう完全に戦争ですよね。そこまでの戦争を覚悟して奪い返す作戦をやるのか？と言ったら実態は違いますね。

この離島奪還訓練で想定しているのは、宮古島であり、石垣島なのです。人が住んでいる島です。ですから当然、住民はどうしたらいいの？ここが戦地、戦場になるわけです。当然米軍も自衛隊も住民の避難には責任を持っていないという事を答えています。住民避難は自治体の責任だという事なのです。

南西防衛強化による陸自部隊の配備

これ(右上)が南西諸島に配備されていきつつある部隊です。このように列島に沿って部隊がどんどん配備されています。



極秘の合意

もう一つ明らかになったのは、今新基地を作っているキャンプシュワブ（辺野古に海兵隊の基地が既にある）の中に、この水陸機動団の一部隊を常駐させるという事が 2015 年に極秘に合意されていました。ですから今までも共同訓練というのはされてきましたし、自衛隊が米軍の持っている北部訓練場に訓練に行く姿もよく見ます。自衛隊は米軍基地の中で訓練しているのか、自衛隊のトラックに兵士をのせて入っていくのをよく見ます。

しかしこれは共同訓練、臨時使用ではなく、常駐という事です。基地に常に自衛隊が米軍と一緒にいるという状態を作ろうとしている。ここまで自衛隊と米軍は一体化してきています。

宮古島



【宮古島 アリランの碑】

宮古島に配備が予定されている部隊

部隊規模は700人～800人

地対空ミサイル部隊 地対艦ミサイル部隊 警備部隊など



そういう自衛隊の配備が進んできているのがまずは宮古島。ここに地対空ミサイル、地対艦ミサイルなどが配備されようとしています。ご覧になって分かるようにミサイルが全部トラックに積まれています。だからどこからでも撃てる。ミサイル基地がどこかにあるのではなく、どこからでも撃てるし、撃ったらすぐに移動して別の場所から撃つ。撃った場所を特定されて反撃されないように撃ったすぐに移動する。という事は宮古島のどこでも反撃の標的になるということです。つまり一発撃ったら宮古島にミサイルが降り注ぐという事です。これらはこれから石垣島でも同じことが進んでいきます。



宮古島にはすでにこのように航空自衛隊のレーダー基地があります。今作られた自衛隊基地はこの野原（のばる）という集落の中に、いわゆる慰安婦として連れてこられた女性たちのための記念碑「アリランの碑」があるのがこの野原の集落です。そしてこの写真を写している場所の後ろ側に新しい自衛隊基地ができました。だからこの集落は完全に二つの自衛隊基地に挟まれた集落になってしまっています。



これは中国を対象にした電波を傍受する装置です。新設された 2017 年秋から運用されている新型レーダー J/EPS7 と呼ばれています。



これが非常に強力な電磁波を出しているものの、健康被害調査は一切されていませんが、人体に悪影響がないはずがないほど強烈な電磁波を出すレーダーがここに新設されています。

米軍が日本で進めようとしているミサイル配備

石垣島には地対艦ミサイルのほか、米軍の新型中距離ミサイル LRHW が配備される可能性もあります。さらに恐ろしいのがあって、石垣島には地対艦ミサイル、船を打つミサイルだけではなく、米軍の新型中距離ミサイルが配備される可能性が非常に高くなってきています。

米国は新型中距離ミサイルを 2023 年から沖縄を始めとして、日本全土に配備する可能性があるのです。中距離というから大した距離を飛ばないミサイルかと思ったら、これは射程 500 km～5500 kmで、中国本土まで届くものです。しかも通常の弾頭を想定しているのですが、簡単に核弾頭に変えられる、そういうミサイルです。

米軍の中距離ミサイルメース B、キューバ危機の時に中国を狙ったあのミサイルと同じものをアメリカは

今開発していて、沖縄に配備を始めようとしています。

2023 年から沖縄だけではなく、アメリカとしては、日本全土に配備する可能性があります。こうしたミサイルの基地が置かれる場所が多ければ多いほど、仮想敵国はどこを狙ったらいかわからないわけです。それを見越して、アメリカは沖縄だけではなく、日本全土に配備しようとしているという事です。

わたしは沖縄ですから、沖縄で起こる様々な問題で、どれだけ沖縄が踏みつけられてきているかという事をご紹介することが多かったのですが、ついにいよいよ日本全体の問題になってきたといえます。沖縄だけではない、日本のどこにいてもアメリカの核戦争に巻き込まれる可能性が非常に具体化してきているということです。

開発が進む中距離核ミサイル

2019 年 8 月、米国がロシアと結んでいた INF（中距離核戦力）廃止条約が失効し、米国は中距離核ミサイルの開発を急ピッチで進めています。ロシアとのこの条約、かつてはソ連との間で結んでいた INF 廃止条約によって、

アメリカは中距離核ミサイルはゼロになりました。ところがその条約を結んでいない中国はどんどんこの中距離ミサイル、核を含めて開発してきていますから、この中距離ミサイルに関してだけ言えば、中国とアメリカとの間に非常に大きなミサイルギャップがあります。中国は約 1000 発持っている。アメリカはゼロです。アメリカは中国とのミサイルギャップを埋めるために今急ピッチでアジア地域に配備しようとしています。その皮切りは日本です。沖縄、そして日本各地に配備し、できるだけ中国とのミサイル格差をなくそうとしています。

表立って核ミサイルとは言いません。通常弾頭のミサイルです。しかし先ほどお話ししましたように簡単に核弾頭に変えられます。ですから当然中国、あるいはロシアにしてみても、アメリカがいつでも核ミサイルになる兵器を日本にどんどん配備するというのは、のど元に核ミサイルを突き付けられるのと一緒にです。非常に緊張が高まると思います。

ですから、ロシア・ウクライナ戦争は対岸の火事ではない。私たちが暮らすこの国も、本当にどういうことになっていくのか。いきなりロシアが攻めてきたり、いきなり中国が攻めてきたりという事はないと思います。これはアメリカの戦略研究、あるいは軍の中でも国防省の中でも想定しています。単独で日本がいきなり中国、ロシアに攻撃される、あるいは侵略される可能性はほぼないでしょう。しかし一番ありうる事態は、台湾を巡ってもし中台紛争、中国・台湾の紛争が起こってしまったら、その時アメリカは沖縄に配備しているミサイルを中国に向けて撃つだろうということです。それが通常の弾頭、核弾頭ではないにしても、中国にしてみればわからないわけです。核も搭載できるミサイルに、今度撃つミサイルは通常弾頭ですよと言っても信じるわけがない。つまり、ミサイルを撃った途端に核攻撃の反撃がやってくるという事です。しかも撃ったのが沖縄であっても、配備しているのが日本全土であるならば、全部が標的になります。日本全土が核ミサイルの標的になるという事です。そんな事態が今日の前に迫っているという事です。

石垣島

そういうミサイルの配備、まずは石垣島からといわれています。でもそれは石垣島に限った事ではなくて、石垣島を始めとしてという事です。



【八重山戦争マラリヤ犠牲者慰霊之碑】

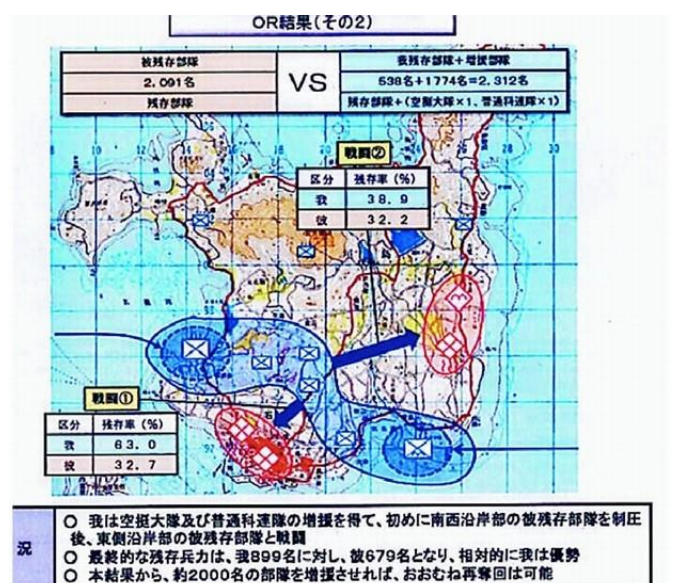
石垣島の自衛隊基地建設地は、特に戦後開拓団が入植してマラリア、害獣、台風被害と闘いながら苦労して開墾した地域です。この地域は基地建設反対の声が強い地域です。於茂登、開南、川原、嵩田の4公民館が反対を決議しています。



これは開南地区の写真ですが、基地建設に行くコンクリートミキサー車です。画像の左側がもう基地建設現場です。道路一本はさんで住宅地があるというような地域です。



このように地元は一生懸命反対しておりますけれども、どんどん基地建設はすすめられています。



これは石垣島が、ある敵国に上陸占領されたときに、どう反撃するかという作戦図です。極秘のうちに自衛隊の中で作られていたことが明らかになりました。

日本共産党の赤嶺政賢議員が明かした防衛省の内部

文書長いので読みませんが、要は実際に何人の兵士、何千人の兵士で、どのくらい消耗して、このくらい増員したら最終的には勝てるという、そういう想定までしているのです。2018年にすっぱ抜かれた記事で、沖縄の国會議員赤嶺政賢さんがこれを国会で追及しました。先ほどの文書で「国民保護」は「自衛隊が主な担任ではない」ので、どういう風にやったらよいか見積もることができませんと言っている。国民保護は自衛隊の任務ではないと、この時から言っています。それなのに、自衛隊が来たら守ってもらえるというのは本当に幻想でしかないと思います。

一体化した戦争準備法の整備

そういう戦争に向けての準備が着々と進められてきています。「土地利用規制法」というのが一番新しい戦争のための法律です。土地利用規制法の正式名は、「重要施設周辺及び国境離島等における土地等の利用状況の調査及び利用の規制等に関する法律」といいます。長いですが、要は重要施設、国境離島がキーワードです。

重要施設とは

重要施設とは何かというと、政府が例に挙げているのは、米軍基地・自衛隊基地・海上保安庁施設は港や灯台。生活関連施設は原発や軍民共用の空港。ただし条文の上で限定はされていません。ですから、政府がここは重要だといえどこでも指定できるという事です。

国境離島

そして国境離島、日本には148の国境に接している人の住んでいる島々があります。これがすべて注意する区域、特別注意する区域とされると、その島民全体が政府の監視される対象となります。ですから、米軍基地が集中する沖縄、そして自衛隊基地が次々にできていて、島々、国境の離島もあるということ。それは突き詰めて言うと145万県民全員が政府の監視のもとに置かれる可能性があるということです。

今までの戦争準備のための法整備というのはこういう形でなされてきました。2013年には「特定秘密保護法」、2017年は「共謀罪法」、そして2021年の「土地規制法」で、これらをひっくるめて軍の動きを隠す。軍への抗議を抑え込む。軍への協力体制を強化する。住民を互いに監視させる。これがセットで戦争準備のための法律が一体化したということ。法整備が整ったという事になります。一つ一つの法律の時にはもちろん反対の声も上がっていきますけれども、でも全体を通して見た時の位置づけは、なかなか見えにくかったと思いますが、もう本当に戦争を具体的に考えた法律の整備がなされているということです。

いつ、どこへ、どうやって逃げればよいのか

さあそうなった時に住民はいつ、どこへ、どうやって逃げればよいのか。軍隊は守ってくれません。石垣島、宮古島でもそれぞれ人口は5万人位います。それを全員避難させるのに、飛行機は何機必要なのか、船が何隻必

要なのかをそれぞれの自治体で試算していますけれども、現実的な数字は出てこないわけです。避難させるのは無理なのです。どこにそんな（避難させる）船あるの？どこにそんな（避難させる）飛行機あるの？住民を避難などさせられない。でも自衛隊配備と戦争の準備はどんどんお構いなしに進んでいる。そんな時に住民は自分達をどう守ったらいいのか？また、小さい子ども達をどう守ったらいいのか？という事ですよね。

本当に途方に暮れることだと思うのですが、私はこの問い「いつ、どこへ、どうやって逃げればよいのか？」と考える前に、もっと大事なことがあるだろうと。

キリスト者の使命

戦争を想定して、いつどこへどうやって逃げるかを考えるよりも、戦争につながるものを拒否していく。すべての軍事基地の撤去を求めて行動する。つまり、非暴力で平和を創っていくことこそがキリスト者の使命ではないでしょうか。戦争になったらどうするか、じゃなくて、戦争にならないようにどうしていったらよいのか？今ならまだできる事がたくさんある。戦争が起こってしまったら、本当にできる事は限られていきます。目の前の救命をも選別しないといけない時が来てしまうかもしれない。この人は助けるけど、この人はもう無理というように、そんな選択を住民が迫られていくことが起こらないように、この戦争に向かう歩みを何とか食い止めたい、という思いでいます。

もはや「沖縄の」問題ではない。

ですから、これはもはや「沖縄の」問題ではないんだ。日本全国が核戦争の脅威にさらされる日がもうすぐやって来る。ですから、全国規模でこの反核運動を起こしていかなければいけないんじゃないかと思うのです。

反核だけではなくて、ミサイル配備、あるいは日本が戦争に巻き込まれ、あるいは積極的に加担していくような動きを何とか食い止めていくという事が大事だと思うのです。先ほどご紹介した INF 廃止条約、アメリカとソ連の間で中距離核ミサイルを全廃するという条約が結ばれた原動力は市民運動でした。アメリカとソ連の核の脅威は、ヨーロッパ世界にしてみたら、戦場がヨーロッパになる。ヨーロッパが核戦争に巻き込まれて大悲劇が起こるという事に市民たちが気付いて、ヨーロッパ中で大きな反核市民運動が起こっていった。それに押されて、アメリカとソ連は中距離核ミサイルを互いに全部無しにしようという条約を結んだのです。

その期限が切れた途端にアメリカはまた中距離核ミサイルの開発を始めています。アメリカだけではなく日本でも川崎重工が受注して日本独自の中距離ミサイルを開発し始めています。これは今の日米一体化、自衛隊と米軍の一体化を考えたら、そこで開発される中距離ミサイルというのは、アメリカと同じように核搭載可能という仕様になるんじゃないか。今の自民党政府だったらやりかねない。閣僚がついにアメリカとの核共有という言葉を使い始めているのです。本当に恐ろしいというか、核戦争になった時に何が起こるのかという事への想像

力はないのか？と思います。

核のジレンマ

核を持っていれば安心、核抑止力といいますが、逆に核のジレンマというのもあるんです。それが 1960 年代から 70 年代初頭にかけてのアメリカの状態でした。

沖縄に 1300 発もの核兵器が配備されたというのは、この核のジレンマなのです。アメリカが 10 発の核を沖縄に配備したら、中国、ソ連は 20 発配備する。(アメリカは)相手に勝たなくてはと 30 発配備する。そうしてどんどん核配備が競争になっていき、お互いにお互いを全滅させてしまうような核を持ってしまう。これが核のジレンマです。核抑止力というより本当に現実的なのは核のジレンマだと思います。そこに日本が足を踏み入れようとしている。

今しなければならぬ事は何だろうか？

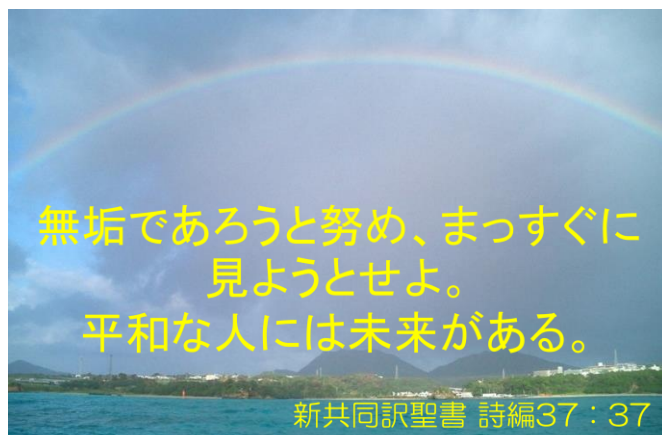
ですから今の日常生活、自分の命も含め、共に生きる人たちの命を守るために今できる事、今しなければならぬ事は何だろうか？と思った時に、政府が言うような敵地攻撃能力みたいな、そら恐ろしい事が普通に今通ってしまう。これはロシア・ウクライナ戦争の影響でもあると思います。そういう軍備をしないと、いつ日本だってやられるかわからないという、政府の軍拡路線を後押しする形で日本国民、市民の中に軍備強化、核共有してもいいくらいの声がどんどん出てきていると思うのです。だからこそ、「違う」と言う事、いろんな形で「戦争になってはいけない」、「戦争をしてはいけない」という方向に向かっていかなければいけないと思います。

私たち、幼稚園、保育園の先生方もそうだと思いますが、子ども達が言い争い、けんかなどをしていたら「ケンカはダメよ」って言いますよね。「ケンカじゃなくてちゃんと話し合ってお互いに何が言いたいのか、何が伝わったのか、何が怒っちゃったのか、お互いにちゃんと聞こうね」って。暴力、殴ったり蹴ったりしちゃいけないという事をだいたい言いますよね。子どもには言うけど、大人にはいいでしょうかね？国と国はいいですか

ね？「ケンカはダメよ。話し合いが大事よ」と、国レベルになったらどうして言わないのか？現場から社会に対して、国に対して、話し合っ、お互いに生きていく道を見つけましょうよ、という事をやっていかなければいけないと思います。

最後に

私がすごく好きな聖書の言葉をご紹介します。「無垢であろうと努め、まっすぐに見ようとせよ。平和な人には未来がある。」平和な人というのはその人の性質が平和というのではなく、平和をつくる人という事です。物事の本質をしっかりとまっすぐに見て、平和をつくっていく。そこにこそ未来があるんだ。私たちの生きているこの現実社会に未来があるように、このことに努めたいと思います。本当に平和をつくっていくことでしか未来は無いと思います。平和と平和を守るために戦争をするという論理もあります。でも本当の未来を残していく。私達に未来があるとすれば、それは平和をつくる場所にしかない。そのことをしっかりと胸に刻んで私たちがなすべきこと、あるいは今身の回りで起こっていること、起ころうとしていること、そこにしっかりと目を向けていきたいと思ひますし、そこから何か気が付いたところから小さくても行動を起こしていく。そこに向かっていけたら幸いだと思っています。どうもお聞きいただいてありがとうございました。



イエス団 平和メッセージ

ロシアとウクライナで戦争が起こっています。あらゆるものの「いのち」が奪われ、当たり前暮らしが破壊される戦争は絶対に許されません。

日本も過去に今のロシアと同じように隣国を侵略し多くの人々の「いのち」と生活を奪いました。そして沖縄は戦場となり、広島や長崎に原爆が落とされ、日本中が焦土と化し、多くの「いのち」を失いました。

沖縄本島を始めとした国境に面した島々が再び「捨て石化」されようとしている現実に関心であってはなりません。私たちは、子どもたち、障がいがある人たち、高齢の人たちなど社会の中で小さくされた人たちに平和をつくりだすために「いのち」を奪い合う戦争やその準備をすることに断固反対します。

ウクライナでの戦争が一日も早く終結し、平和な社会が回復することを強く望みます。

2022 年 7 月 15 日

イエス団 理事長 黒田道郎